

巻頭言
Greeting

×

小林 久実
Hisami Kobayashi
聖書神学舎 講師
(奈良福音自由教会牧師)

Profile

1959年秋田県生まれ。大学と大学院で有機化学を専攻。聖書神学舎30期卒。埼玉県で3年余、京都市で19年余の牧会の後、2011年から奈良福音自由教会牧師。1997年度から講師（弁証論II）。



「目を高く上げて」 イザヤ 40:26

「私はクリスチャンで、神が天と地を創造したと信じています。」「今時、そんな考えをする奴が日本におるんか。そんな考え、あと10年もしたら消えてなくなるわ。」

このやり取りは、大学院に入った私の研究室での自己紹介と、間髪入れずになされた反応です。1982年のことです。「この研究室にいる間に、信仰が消えてしまうのだろうか?」と、肝を冷やしました。

その半年前、私は生まれて初めて教会に行き、新約聖書からの伝道メッセージを聴きました。イエス様の愛に触れて感動し、自分の罪を認めてイエス様を信じました。ただ、すべての始まりは進化だと信じ込んでいたため、創造の記事を含む旧約聖書を受け入れるのには数か月かかりました。

厳しいことばを浴びせられましたが、主の恵みと背後の祈りに支えられ、36年後の現在も、「そんな考え」は消滅せず、かえって私の中で強められています。聖書神学舎に入学したのも、「創世記を徹底して学び、教会で用いられた」との動機からでした。現在、弁証論の中でも聖書と科学の関係に特化した弁証論IIの講義を担当しています。この学びは私のライフワークとなっています。

聖書と科学に関して短く触れるならば、聖書と科学は両立します。現代科学の基礎を築いたのは、熱心な信仰者コペルニクス、ケプラー、ガリレオたちでした。彼らは、「神様は秩序を重ん

じられるので、被造物にも秩序があるはずだ」との思いで忠実に研究を重ね、当時の権威に逆らっても地動説を唱え、種々の法則を発見し、神様に栄光を帰しました。

科学の現在の結論である「進化」や「何十億年という長い年代」は、聖書の記述と一致しないように見えます。しかし同じ神様に由来する聖書と自然とが、違う結論になるはずはありません。研究の進展が待たれます。それ以外の科学の結論は、聖書と矛盾しません。実際、私が所属していた研究室でも「人体内の化学反応がすばらしく効率が良いので、試験管内でも真似る」というテーマを掲げていました。

現代人は、ビルや電車、椅子やパソコンなど、ほとんど人工物に囲まれて暮らし、心も他人がどう思うかに向いています。この世には、罪や欲も満ちあふれ、神様以外の物や人を絶対化するような考えが渦巻いています。しかし聖書は、冒頭で神様を創造者として紹介しています。実に創造は、根本的で大事な教えなのです。「あなたがたは目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。」と命じられています。私たちも、目も心も高く上げて、すべてを造られ、支配しておられる神様ご自身に向けましょう。

No.173 Topics

- p03 新入会生紹介
- p04、05 卒業生の紹介とあかし
- p06 新入会生を送り出す教会の声
- p07 学びの窓

赤坂 泉

Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

年度のはじめに

新年度も諸教会、皆様の上に恵みが豊かに備えられていることを信じて、御名を賛美します。

今春、聖書神学舎からは4名が卒業しました。多様な現場で、みことばに仕える伝道者として主に用いていただきますことを感謝します。迎えた新入会生は、本科では22歳から60代までの男性6名が入寮し、聖書科・教会音楽専攻では本科卒業生で教会教職として奉仕している女性1名が通学します。続く紙面も手がかりに、どうぞ皆様の祈りにお覚えください。学舎における学びと訓練が、奉仕教会での経験等と相まって、一人一人において実を結んでいくことを楽しみにしています。みことばを学べば学ぶほどに、主を愛し、隣人を愛することを深め、キリストにあって成熟した者とされるようお祈りください。

昨年度の経済の必要が十分に満たされたことも主に感謝しています。特に諸教会からの維持献金が祝されたことに、主の励ましを覚えています。予算計上していた営繕の大きな必要もまかなわれました。皆様の主への献身に改めて感謝申し上げますと共に、今後とも、力強いお祈りとご支援をよろしく願います。

人事往来

学舎周辺の人事往来についても前号に紹介しました。主が、この面でもいつも備えて来てくださいましたが、教職員の人的資源の必要は多大了。教会のわざとしての神学教育がその責任を正しく果たして行けるようにお祈りください。

夏の予定

夏期研修講座「祈りの聖書的な理解を求めて」に多くの申し込みを頂戴しています。「聖書的な

理解を求めて」のシリーズは、礼拝の、聖餐の、賛美の、と続けたところで謂わば未完になっていました。当時の展望の中にあったもう一つの大切な主題を今回取り上げます。礼拝における祈りを考え、聖書から教えられたいと備えています。教会音楽夏期講習会では詩篇103篇に注目して、みことばと音楽を学びます。こちらも定員超えを心配しながら、備えを進めています。いずれも、諸教会の礼拝がさらに豊かに整えられることに資する学びの機会となることと思います。

キャラバン伝道は、5チームで北海道、埼玉、長野、石川、京都の各地で奉仕させていただきます。

今後の必要

目下の緊急の必要は専任教師が加えられることです。次世代の教師・講師陣が加えられることも必要です。教師陣の研究・研修のためにもお祈りください。聖書信仰の理解を深め、教会の拠って立つ信仰の基盤をさらに堅固なものとし、また的確な発信をさせていただけますように。

聖書信仰のたたかいはいつも激しいものです。必要はいつも多大です。それゆえ、みことばに信頼して、ともに主に祈ってまいりましょう。

「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」(ピリピ4:6,7)



左から、吉村、吉田、谷口、高石、小山、大橋、田村

氏名	出身教会	奉仕教会
聖書神学舎本科 [6名]		
おほし 大橋 歩 おやま 小山 稔 たかいし 高石 啓明 たにくち 谷口 真樹 よしだ 吉田 知基 よしむら 吉村 直人	保守バプテスト同盟 単立 日本福音キリスト教会連合 日本バプテスト宣教団 日本福音自由教会協議会 保守バプテスト同盟	山形第一聖書バプテスト教会 小倉聖書教会 かもい聖書教会 伊勢バプテスト教会 グレース宣教会二上チャペル 保守バプテスト津田沼教会
		西多摩バプテスト教会 小倉聖書教会 かもい聖書教会 飯能キリスト聖園教会 グレース宣教会東京チャペル 保守バプテスト津田沼教会
聖書神学舎聖書科 [1名] [教会音楽専攻]		
たむら 田村 尚美	日本同盟基督教団	朝霞聖書教会

わたしについて来なさい。

高石 啓明

「わたしについて来なさい。(マタイ9:9)」収税所に座るマタイに語られたその短い招きが、私が召しを確信するきっかけとなったみことばでした。主は、罪に捕らわれ滅びに向かっていた私の魂を救って下さいました。その救いの御業は本当に一方的な恵みとあわれみでした。主に救われたこの命をどのように用いるべきか、祈りの中で神様に問いかけていた時、この招きのみことばが心の内に強く鳴り響き、私はマタイのように立ち上がって主に従い、主と主の教会に仕える決心に導かれました。入会時に語られた事は、「主に立ち返り続ける」、「死に至るまで忠実でありなさい」、「主を喜び楽しむ」、ということでした。主に救われたこの命の重さ、献身者としての責任の重さを再確認すると同時に、自分が弱く罪ある者であることを自覚し、いつも主ご自身に立ち返り、主のみことばに直接的に仕えられることを喜び楽しむような学びの時を期待し、歩みたいと思います。

「神が」の世界で

吉村 直人

幼い頃から私は、文字どおり自己中心的な人間でした。何ごとも「私」という出発点からしか考えられず、いつも思い煩っていたように思います。私が神様を信じることが出来るためには、私がおもっと楽しむためには、私が認められるためには、といったようにです。これはある意味で当然ですし、悪いことばかりではないかもしれませんが。しかしイエスキリストを受け入れた時に与えられたのは、自分への執着からの解放でした。人生の主語が「私」から「神が」に変えられたのです。

この時から少しずつ周囲の見え方も変えられていき、自分のためではなく主のために生きていきたいと願うようになりました。そして列王記 第一 19章の「エリヤよ、ここで何をしているのか」というみことばに押し出されるように伝道者への召しを受け止めました。「私が何をなすか」ということ以上に「神の御前で何をしているのか」ということを問われつつ、歩ませていただけたら幸いです。



左から、天野、三原、清水、渡辺



氏名

奉仕先

聖書神学舎本科 [4名]

あまの たかのり
天野 孝則
わたなべ いさく
渡辺 井作
しみず かつとし
清水 勝俊
みはら しもん
三原 識文

単立

東村山聖書教会

相原キリスト集会

単立

南口ンドン日本語キリスト教会

保守バプテスト同盟

おやま
小山バプテスト教会

単なる延長ではない

あまの
天野 孝則

聴講生時代から私を知っている方々には、「結局、何年ですか?」とよく質問されます。その質問に対して、私は「12年もかかっちゃいました」と照れ隠しに笑いながら答えています。ただし、ひとくりに12年と言っても、本科でのこの4年間の学びは、その前の8年間の聴講の「単なる延長ではない」と実感しています。

この4年間の本科での研修生活を通し、主は私に改めて召しと使命とを問われました。私は、以前にも増して自分自身の無力さと内面の貧しさに向き合わねばなりません。ですが、主は私の当初の願いや計画とは異なる、広いところへ

と導いてくださいました(詩篇18:19)。

この春に遣わされるのは、これまでの12年間も宣教に励んできた地域です。それでも、主の備えてくださった新たな出発、「単なる延長ではない」節目の時と心得て、この学び舎から遣わされて参ります。

このような者をも伝道者として召してくださった主の真実と忍耐とにすぎる思いで、伝道と牧会の働きの現場へと向かいます。これまで折々に私たち夫婦を励まし、祈り、支えてくださった皆さまに心からの感謝を申し上げます。

入会する前に、「神学校で学んだことは、聖書は神のことばであるということです」というあかしをお聞きすることや、読ませていただく機会が何度かありました。当時の私は「神学校に行くまでもなく当たり前のことではないのか」と不遜なことを思っておりましたが、いざ自分が卒業する段となって何を学んだかを考えると、やはり「聖書は神のことばであるということ」だと思わされております。それは、聖書への信頼を増させていただいた、と言い換えることもできます。外からどんな疑いを向けられても聖書は揺るがないこと、自分自身に疑問や分からないことがあっても聖書のうち

には答えがあること、何を実践するにしてもその源泉を聖書に求めることができること、それらのことを知らなかったわけではありませんが、本当にそうなのだと教えられました。これから主の働きに向かうにあたって、自分自身の不足と状況への不安を覚えますが、神様ご自身がお与えくださった決して揺るがないみことばに信頼して、歩みを進めて参りたいと思います。

召し

清水 勝俊

今、聖書宣教会の卒業を前にこれまでの日々を振り返っています。はたして自分はどれほど成長したでしょうか。あまり自信がありません。

卒業後は、入会前から重荷に思っていた海外の日本人宣教のために働くことになりました。召しとはすべて主に委ねていくものなので、どうなるかと思っておりましたが、結局、変わりませんでした。しかし、入会前には思ってもいなかったこととして、新しく教会を開拓しようとの思いが与えられました。

卒業研究はパウロの生涯を学びました。パウロは異邦人宣教に召され、日々、聖霊の導きに従い働きます。彼の働きは教会形成の標準化を図るも

のとなり、以後の世界宣教に必要な不可欠のものでしたが、それは当初意識になかったかも知れません。少なくとも、そのための困難は予想外でした。行く先々、妬まれ、追い出され、殉教する。そんな人生でした。

召しとは何か。改めてみことばに聞き従うことの大切さを思われています。キャラバン先で、教会開拓とは何も特別なことでなく、日々、主の導きに従うことだと教えられました。何もできない私を承知の上で召してくださったお方のみことばに、ただ日々従い、与えられる人生を全うしたいと願っています。

見え始めていること

三原 識文^{しもん}

聖書宣教会での3年間を振り返ると、暗中模索の日々の中で、ようやく方向性が見え始めた、という思いです。1年時には、「この学びをどうやって活かせばいいのだろう」と考え続けていました。毎日ギリシャ語とヘブル語の単語を次々覚えていくのは楽しかったとはいえ、最終目的が見えなかったからです。2年時は限界を超える忙しさの中で、先が見えない不安と戦っていた思い出があります。「学び」と「奉仕」で最大値を得るために、「健康」を限界まで削る挑戦をし続けていました。3年時になって、ようやくつながり出した、と思いました。積義ができるようになり、聖書神学の知識の貯金がたまっていき、聖書を読むのが楽しく

なりました。それが実践的な学びと有機的につながって、それがまた聖書の語っていることの理解を深め…という、良いサイクルが回り出したからです。

聖書について、頭の中には常に問いが立てられており、いつも回答を模索し続けている感覚があります。かつての研究者時代を思い出し、懐かしい感じもします。もちろん、神さまに聞き続けるという全く違う意味をもつことです。これからもずっと、こうして聖書に聞き続けながら歩もうと思います。

04 新入生を送り出す教会の声 From the Sending Churches

献身者を送り出すチャレンジと喜び

熊久保 公義

Kimiyoshi Kumakubo

かもい聖書教会 牧師

ひろあき

高石啓明兄が聖書宣教会入会に至るまで、教会も主の召しに応えるチャレンジと成長の機会を頂きました。彼に献身の思いがあることを聞いたのは2012年、宣教船ロゴスホープ号乗船の願いがあると知った時です。役員会にてその思いを語ってもらった際、その願いがみことばにより与えられたことを役員一同確認し、彼の歩みや賜物を考えた上で彼の宣教への願いは主からの召しであるとの確信に至りました。

当時の礼拝聖書箇所から、献身者は教会が送り出すとの原則を教えられていましたので、早速礼拝でも証しの機会を持ちました。教会全体も彼に与えられた召しが個人的なものに留まらないことを理解し、私たちがもまた主の働きに参加したいと、支える会を発足させて乗船のための必要の一部を毎月捧げていく決断をしました。

2年間の乗船後、高石兄は宣教の報告と共に改めて直接献身への強い思いと神学校入会への願いを証しました。個人の献身の召しとその都度教会で分かち合われ、教会もまたそれに応えるチャレンジを受けました。今は教会が献身者を送り出す喜びを頂いています。

教会の皆さんと(中央が高石神学生)



会堂外観



主の召しに応える

谷口 峰夫

Mineo Taniguchi

伊勢バプテスト教会 牧師

諸教会が直面する「教職者の高齢化と無牧」という課題は、日本バプテスト宣教団にとっても切実な問題です。献身者が起こされることを祈る中で、聖書宣教会に兄弟を送り出せることは大きな喜びです。

しかし、若い兄弟を神学生として送り出す過程は、平坦ではありませんでした。献身とは自分の願いを実現するための手段ではありませんし、信徒として主と教会に仕えることも、キリスト者にとって大切な献身の姿です。兄弟に与えられた直接献身の思いを共有し、召しの確かさを問い、主のときはいつか、必要とされる備えは何かなど、短い期間でしたが共に悩み祈りました。そして、神の栄光がほめられたために兄弟が献身へと導かれたと受け止め、入会の時を迎えました。

聖書神学舎での学びと訓練をとおして、主の導きの確かさを共に見つめられることを感謝しつつ、主が遣

わされる道筋が明らかになるようにと祈っています。すべてのものの上に立ち、すべてのものを満たす主へ、神からお預かりしているすべてをささげられる者となれるよう、聖書神学舎での学びが導かれることを願っています。

会堂外観



礼拝にて



みことばそのものに触れる

田村 将
Masashi Tamura
聖書神学舎 教師

イエスは彼に言われた。「律法には何と書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか。」ルカの福音書10章26節

4年間の北米での留学期間中、多くの情報に触れ、様々な新しい知識に魅了(或いは当惑)されてきましたが、非常に印象に残った一つのことがあります。それは、3、4年目に在籍したブランダイス大学大学院の旧約聖書のクラスでのことでした。

一二世代前の大学の雰囲気とは異なり、学部 (Near Eastern and Judaic Studies) の論調は極めて自由主義的でした。そんな環境での“聖書”のクラスですから、その内容は推して知るべし、でした。(一時は下火になっていた五書批評学における資料説も復権し、Neo Documentarian なる呼称を自ら唱えて活発に議論されていました。Yale大学のJoel Badenは特に注目されており、ブランダイス大学での講演もありました。) それは聖書を神のことばと信じる者にとっては戦いの場でした。

そんな中で受けた「伝道者の書」の授業でのことです。そこで期待されていたのは何よりもヘブル語のテキストを繰り返し読む、ということでした。私は驚きを隠し得ませんでした。とにかく、テキストそのものに触れること。繰り返し読むこと。全体像を把握し、問題と思しき箇所があればメモを残して後で(あくまでも全体を見た後で)戻って思索を深めること。批評的で自由主義的なこの大学で、テキストそのものを大切にする姿勢を示されたのです。

改めて思えば、それはこの授業だけのことではありませんでした。どのクラスでもテキストそのものを大切に作る気風がありました。そして、オリジナル(一次資料)に触れること。木だけではなく森全体を絶えず見ること。森だけでなく木もしっかり観察すること。そのような基本中の基本を期せずして叩き込まれた2年間でした。

その後、更に学びたいと願いつつもそれが叶わないまま、ある意味で失意の内に日本に戻りました。しかし、思いがけず母校で教鞭をとる機会を与えられ、「旧約通論」の授業を担当させて頂いています。長年この科目をご担当くださった久利先生のシラバスを何年かぶりに読み返すと、次のように書かれているのが目に留まりました:「もとなる素材を持たない人は、それを固めることも、修正、発展させることもできない。いつも借りもの、仮のものに頼る他ないことになる。」

批評的な学者は本当によくテキストを読み、知っています。翻って「聖書信仰」を標榜する私たちはどうだろうかと真剣に考えさせられます。聖書そのものをどれだけ読み、そのメッセージに耳を傾けてきただろうかと問われます。この学び舎で、今までもそうであったようにこれからも、みことばに立つ、という原点を見失わないようにと切に願われます。

○ 図書館から — リサーチ・ライブラリを目指して (1) —

津村 俊夫

Toshio Tsumura

聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

44年前、8年間の留学を終えて帰国する前に、「研究を続けるのなら、M君のように帰国しないでヨーロッパにいた方が良い」と、ある先生に言われました。専門の図書が全く整っていない日本に帰ることは、研究を諦めることを意味するのだと感じました。帰国したら、案の定、必要な書籍は皆無に等しいものでした。思い余ってゴードン先生にお便りしたら、「状況が整ったらやろうと考えるな。そのような状況は来ない。今置かれているところでまず始めることが大切だ」と、ユダヤ人賢者のことばを引用して励ましてくださいました。何事も与えられた状況の中でコツコツと積み上げていくことが大切であることを教えられました。

しばらくして、私が舟喜順一先生から図書館の責任を引き継いだ時には専門の司書もいなく、かなりの本は先生方からお借りしたものでした。図書室といえば、学生寮の廊下の向かい側にあった狭い空間でした。だんだん本の置き場がなくなり、教室の後ろとか、チャペル兼教室兼食堂に並べるなどしていました。探している本が、寮になれば教室にあるかもしれない、そこになればチャペルにあるかもしれない。ほのかな期待を持って、木造の古い長屋のような建物を小走りで探し回ったものです。

その数年前の一時期、慶応大学の図書館学を学んだ〇姉がカタログを、それまでのデュレイ・システムからユニオン神学大学図書館システムに移行してくださっていました。(続く)

○ 2017 年度収支決算概要 / 2018 年度収支予算概要

単位/千円

収入の部	2017年度予算	2017年度決算	2018年度予算
維持献金	28,500	28,840	28,500
指定献金(研修生)	26,557	26,454	27,300
特別指定献金	8,500	9,677	8,500
その他収入	6,010	8,377	8,111
収入の部合計	69,567	73,348	72,411

主の御名をあげます。

2017年度も、日々主にある皆様方の温かいお祈りと献金のお支えをいただき心より感謝申し上げます。

今年度は、収入の部で祝福を受けました。特に維持献金が予算額を僅かでも上回ったことは大きな励みでした。収支差額も僅かですが黒字となり主の御名をあげました。

また、新年度予算は基本的には昨年実績をベースとしましたが、収入予算が満たされますようお願いいただけましたら幸いです。

以上感謝をもって報告させていただきます。
(聖書宣教会財務)

支出の部	2017年度予算	2017年度決算	2018年度予算
活動費	6,410	6,242	6,460
管理費	14,709	14,291	13,512
人件費	33,648	33,355	33,769
諸準備金繰入	8,500	9,677	8,500
その他支出	6,300	9,736	10,170
支出の部合計	69,567	73,301	72,411
収支差額	0	47	0